

## エジプト・紅海沿岸の港湾都市と景観 —サウジアラビア・ハウラー遺跡の調査成果からの逆照射の試み—

Reconstructing a landscape of port-site at the Red Sea coast of Egypt:  
Introduction based on the preliminary research results at al-Hawra', Saudi Arabia

長谷川 奏 (早稲田大学総合研究機構客員教授)

So Hasegawa

### はじめに

サウジアラビア・日本の合同調査隊は、2018～2019年に紅海沿岸のハウラー遺跡において、考古学の分布調査を行った。本発表はこのサウジ側の遺跡調査の成果(長谷川他2019、Hasegawa et al. 2019)をベースとした港湾都市イメージを素材とし、エジプト側の港湾都市景観を逆照射する試みである<sup>1</sup>。研究はまだ開始されたばかりであり、本稿は今後の研究の展開を見通した予察の段階の報告である。遺跡調査の研究対象地域であるヒジャーズ地域は、メソポタミア文明の影響下に独自の文化を育み、ローマ時代には『エリュトラ海案内記』で知られる海上交易の場となり、イスラーム時代にはメッカ巡礼の舞台であった。実際のところ、ハウラー遺跡は、『エリュトラ海案内記』内のサウジ側の港レウケー・コーメーの有力候補でもある(薮1999他)。ハウラー遺跡の発掘調査では、その可能性は将来的な問題として押しとどめ、現地表面で確認される初期イスラーム時代のトピックに焦点を当てて進めることになるが、古代末期との接点は、こと本研究にとっては重要な視点となる点を留意しておきたい。

### 1. サウジアラビアの港まちハウラーの遺跡構造

まず冒頭に、ハウラー遺跡の調査成果を要約しておきたい。ハウラー遺跡は、ヤンブーの北方、ウムルジュの約10km北側に位置する(図1)。遺跡は、南北1.7km、東西0.7kmの範囲が鉄条網で保護されているが、実際はもっと広がりがあり、現在は住宅が建っているところにも遺跡は続いていたであろう。ここは1980年代に、在地の考古学者がトレンチ調査を行っており、モスクの痕跡等をみつけているが、基本的に未調査の遺跡である。私たちの調査によって、遺跡は、港域と集落域に分化できると考えられた(図2)。

港域は、山岳部からつながるワーディーの開口部のへりにあたっており、近代から現代まで使われていた港に繋がっていく位置にある。ここには、集落域でみられるような壁体遺構が殆どみられず、井戸が5つほど集中分布していることから、飲料水の取得と深く結びついていたと考えられる<sup>2</sup>。また火山岩ブロックを積んだ遺構は、舳がわたる場として利用さえしていたとも思われる。このワーディーの開口部の出土遺物は、大型の甕や水壺、アンフォラ片とガラス容器の破片などであるが、16～17世紀の染付やオスマンパイプな

どが混在していることから、港は近代になって一部利用されていたとも考えられる。

一方、集落域は、ワーディーから3～5mほど高くなった丘陵の上に形成されており、東西300mほど、南北150mほどの規模を測る。ここには、House 1～House 3という住居の集中区があったと考えられる(図3)。House 1 areaにみられるように、住居の上部構造は既に失われているが、残った基礎部から、住居はさんごと火山岩のブロックを利用した作りであり(図4)、外壁は70cm程度、内壁は40cm程度の規模と推測された。House 1の北側には、1980年代の試掘調査でコーランの一節が表された堂々とした作りの石製リンテルが見つかっており(図6)(al-Ghabbân 2011: 209-219, 331-351, vol. 1/ 東京国立博物館 2019: 329-330)、モスクの存在が推測されることから、ここが居住区の中でも一つを中心と考えられた。House 2 areaは、周囲の集落域よりさらに2～3m高い部分(標高6～8m)に形成されており、高台からはウムルジュの湾がほぼ見渡せる位置にある。クリーニング調査により、ここからランドマーク的な建造物がみつかった。遺構は一辺が34mほどの方形の遺構であり、壁体厚が約1.5mの極めて厚い壁をもつが(図6)、これは歴史文献にみられる砦の存在<sup>3</sup>と深く関わると考えられ、港まちの景観全体に関わる重要な鍵となるであろう。

集落域で取り上げられた遺物は、素焼きの土器、陶器、石製容器、ガラス器等の生活雑器、装身具、道具などが代表的なものである。陶器には、青緑釉(図7-1)、緑釉、黄釉、白濁釉のものが多く、イラク等の影響下に作られたものと思われる。幾何学的な下絵を暗紫色の彩画で描いた後に黄色や緑の釉薬をかける特徴的な陶器(splash ware)は、ヒジャーズ地域とパレスティナ、エジプトがネットワークで深く繋がっていた初期イスラーム時代の製品で、ヒジャーズ陶器と呼ばれるものである(Whitecomb 1989: 173-175)(図7-2)<sup>4</sup>。またラスター彩陶器は、極めて細かい粒子の白色陶土で作られており、やはりイラク、シリアからの産物である可能性がある(図7-3)。石製容器はステアタイトで作られたもので、さまざまな形の容器やランプである<sup>5</sup>。それらの総体は、概ね9～12世紀頃に位置づけられる<sup>6</sup>。

## 2. 初期イスラーム時代の紅海沿岸域をめぐるヒトとモノ

ハウラー遺跡における活動痕跡の主要な年代のひとつが明らかになったので、以下では当該の初期スラーム時代の紅海沿岸域におけるヒトとモノの動きをもう少し広い観点からみてみよう。パワー(Power, T.)が強調するように、アブドルマリク(r.685-705)の治世から始まる「長い8世紀」はイスラーム勢力の側からさまざまな事業がなされた時代であった(Power 2009: 111-117, 2012: 103-143)。正当カリフ時代からウマイヤ朝時代には、エジプトからアラビア半島のイスラーム大本営への穀物輸送のために、フスタートからスエズにまで繋がるトラヤヌス運河が「カリフの運河(Khalīj amīr Mu'amminīn)」と呼ばれて重要な役割を果たした。アッバース朝のマアムーンは、833年にフスタートにおける軍を解体して伝統的な軍の役割を閉ざしたが、一方で、金鉱山へのルート開拓のために、エジプト東方砂漠のベジャ征討を開始し、紅海地域への積極的な活動も行っている。9世紀の半ばのアッバース朝の混乱期に、ペルシア湾経由の交易路が不安定になったことから、トゥールーン

朝以後、紅海をめぐる商業ネットワークはめざましく発展した。9～10世紀には、アスワン～アイザーブに多くのアラブが住み着き、特にアイザーブは金や象牙の輸出港として、またメッカ巡礼への港として繁栄した。当該時期には、エジプト側ではファイユームや中部エジプトのバフナサやアシュート等で織物産業が盛んになり、生産物が港から輸出されていた。こうした流れの中で、ヒジャーズ地域では、ハウラーに加えて、ウアイニッドやワジュフなどがスエズ～ジャールを經由してジッダに至る巡礼路の港として機能し、後背地の Wadi al-Qura がマディーナとを結ぶ基幹の道となり、8～12世紀において、クルフ (Qurh あるいは al-Muba'iyāt) はこの地域最大の町となった<sup>7</sup>。

このような歴史的展開を考えると、ハウラー遺跡の比較考察の対象として最も重要なものは、エジプト側ではスエズ、サウジアラビア側では、ウアイニッド、ワジュフ、ジャール等が考えられる。しかしながら、スエズは1930年代の調査以降、遺跡は都市開発の波に飲み込まれて保全されておらず (Bruyère 1966)、ウアイニッド、ワジュフ、ジャール等も調査は行われているが、いずれも調査区域は部分的であり (al-Ghabbân 2011: 180-200, 219-231, vol. 1)、港まちの景観を復元する材料には至っていない。そこで、当面の研究は、ハウラー遺跡の対岸に近く、考古学調査も進展しているベレニケ、クセイルといったところから巡見する手順が適当と考えられる。次節では、これらに加え、初期イスラーム時代に新たに建設された都市としてヨルダンのアイラ (アカバ) を概観してみたい。

### 3. エジプト港湾都市の構造—予察として—

ベレニケは、エジプト・スーダン国境近くに位置する。アメリカのデラウェア大学とライデン大学の合同調査隊が1994～2001年に調査を行った。プトレマイオス2世が基礎を築き、プトレマイオス朝時代、帝政ローマ時代、ビザンツ時代の3時期にわたって利用された。ベレニケは、イスラーム時代に用いられた痕跡はないが、港の構造や遺跡の立地条件を考察する上で、重要な事例と考えられる。遺跡は、雨季に山岳部から流れる水が流れるワーディーを避ける高台に作られている点は、ハウラー遺跡と同様である (Sidebotham 2008: 7-11)。東西に320m、南北250mの範囲に、港域と集落域が分布する。集落域の中央にはセラピス神殿があるが、後に教会が集落の東方にできている。一方、港域では、岸壁部分には栈橋が作られている。陸を上がったところには、倉庫群、工房、墓地が分布していたと考えられており、工房では多くの玄武岩片がみつかつており、これはもともと船底に安定のために置くためのものが、穀物のすり石や健在としても、さまざまに加工されたと考えられている。

クセイルは、ナイル沿岸のキフト・コースから東側に延びるワーディー・ハマーマーの出口にあり、11～16世紀に、アイザーブに次いで重要な港であった。シカゴ大学が1979-1984年に、サウサンプトン大学が1999-2003年に調査を行った。港域はまだ明確に同定されていないが、ワーディーに面した北側部分まで冠水し、ここが港として利用され、その東南に集落域があったと推測されている。港域は出土資料からは、「クセイルはコースの港である」ことや、「ワーディーに碇を下ろした船」の記述がみられることから、

湾の出口のところが、碇を下ろす場所で、舁などにも用いられた場であったと考えられる (Regourd 2011: 339-343)。港を上がったあたりに、木造船の修理の場があったことが出土資料から読みとられており、これに関連して、船体遺物、鉄片等の金属片、焼いた貝等が集中的に出土している (Blue et al. 2009: 111-115)。また集落域には「シャイフの館」があり、ここが商業活動の中心地であったと考えられている。冒頭に述べたように、9～10世紀にはファイユームや中部エジプトで織物産業が興隆していくが、クセイルではこれらに加え、インド地域から齎された織物も多く見つかっており、当面、ハウラー遺跡との関係では最も重要な研究対象といえよう。

もうひとつの観点、砦遺構との関わりである。アイラはアカバ湾に面したところであり、周壁をもつ町として初期イスラーム時代 (650 年頃) に作られ、内部には塔、門、通りが作られている。ここを 1986 にシカゴ大学が調査している。この町の南側に、初期イスラーム時代の砦が作られているが、内部はキャラバン・サライと複合した作りになっているのは興味深い (Damgaard 2009: 88-89)。

## おわりに

本論考は、現在サウジアラビアの紅海沿岸のハウラー遺跡で行われている調査成果をもとに、エジプト側の港まちの景観復元を手がけるものである。ハウラー遺跡の最も主要な活動時期のひとつが初期イスラーム時代 (9～12 世紀) であり、港まちの構成が大きく港域と集落域に分化できる中で、集落域は、集落・砦に加えて、市場などにも隣接する空間である可能性を指摘した。歴史文献から、ハウラー遺跡はエジプト巡礼路 (スエズ～ジッダ) として重要な役割を果たした点が指摘されているので、スエズや近隣の港町が比較対象として挙げられるものの、いずれも現況の調査状況では直ちに俎上に置くことができないので、紅海対岸であるエジプトの主要港に眼を向ける必要性を述べた。その中でも、最も深く研究に関わるのは、ベレニケとクセイルと思われるが、特にクセイルは港域の構造までは明確に同定されていないものの、初期イスラーム時代にナイル沿岸の都市やインド洋海域と深く繋がっていた時代背景や出土した港の役割を推測させるアラビア語資料も出土していることから、重要な研究対象であり景観復元に関する比較考察は喫緊に取り組むべき課題とも思われる。

## 註

- 1 本論考のうち、サウジアラビア紅海沿岸のハウラー遺跡の調査自体は、基盤研究 (S) 「中東部族社会の起源: アラビア半島先史遊牧文化の包括的研究」日本学術振興会、藤井純夫 (代表) (課題番号: 19H05592) のうちの分担研究として進められているが、エジプトにおける港湾都市の比較構造研究は、新学術領域研究 (研究領域提案型) 「古代エジプトにおける都市の景観と構造」日本学術振興会、近藤二郎 (代表) (課題番号: 18H05446) 《都市文明の本質: 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 (山田重雄代表)》内の分担研究で行ったものある。
- 2 ハウラーにはいくつか井戸があり、良い (甘い) 水が出ることで、そこには碇を下ろす場所 (irsā'Ō)

があったことを述べている (al-Idrīsī: 88)。

- 3 ハウラーには砦があり、その周りには多くの住民が住む集落があり、集落と海との間には市場があることが記されている (al-Muqaddasī: 83)。
- 4 ウイトコムはさらに踏み込んで、この種のスプラッシュ文の陶器の生産地をハウラー周辺に推測している (Whitcomb1989: 181)
- 5 ハウラーには鉱山があり、そこを切り出して石製容器 (abārim) が作られていたことや、近くに研磨石を産する山 (Jabal Raḍwa) もあり、産物が広くいきわっていたとされる (al-Idrīsī: 88)。
- 6 13世紀後半には、ハウラーの水は飲めない質に劣化していき、威容を誇った建物が廃墟になり、誰も住んでいない地になったことが窺われる (Yāqūt: 316)。
- 7 ムカッダシー (d.991) は、ヒジャーズの最大の都市がマッカであり、これに次ぐ大きな都市として、内陸部ではターイフやヤスリブなど、10数の都市を挙げているが、この地域で最も繁栄していたのはユダヤ教徒が多く住むクルフであり、人口も多く通商や自然の生産物もたいへん豊かな地であり、シリア・エジプト・イラク巡礼道とヒジャーズの諸都市の交差点の様相であったとされる (al-Muqaddasī: 69, 84)。

#### <参考文献>

##### (和文献)

- 薮勇造 1999: 「ミュオス・ホルモスとレウケー・コーメー」『東洋学報』第81巻、東洋文庫、pp.1-28。
- 東京国立博物館、サウジアラビア国家遺産観光庁、NHK、朝日新聞社編 2018: 『アラビアの道 — サウジアラビア王国の秘宝 —』大日本印刷。
- 長谷川奏、徳永里砂、西本真一 2019: 「サウジアラビア・ハウラー遺跡の構造に関する新所見—分布調査(2018,19)の成果から—」日本西アジア考古学会、筑波大学、2019/6/15,16 (『要旨集』p.52)。

##### (欧文献)

- Blue, L., Cooper, J., Thomas, R. and J. Whitewright (eds.) 2009: *Connected Hinterlands: Proceeding of Red Sea Project IV, Society for Arabian Studies Monograph No.8*, Southampton.
- Bruyère, B. 1966: *Fouilles de Clysmā-Qolzoum (Suez) 1930-1932*, Cairo.
- Cornu, G. 1985: *Atlas du monde Arabo-Islamique à l'époque Classique*, Leiden.
- Damgaard, K. 2009: “A Palestinian Red Sea Port on the Egyptian Road to Arabia: Early Islamic Aqaba at and its many hinterlands” *Blue et al. (eds.), op.cit.* 85-97.
- al-Ghabbân, Alī Ibrāhīm, *Les deux routes Syrienne et Égyptienne de pèlerinage au nord-ouest de l'Arabie Saoudite*, Le Caire, 2011.
- Hasegawa, S. and R. Tokunaga 2018: “Preliminary Report of the First Season of the Saudi-Japanese Archaeological Mission in al-Hawra', Umluj and its Hinterland: March 2018” *Archaeological Research at al-Hawra': Medieval Port Site at the Red Sea Coast of Saudi Arabia*, vol.1, 1-34.
- Hasegawa, S., R. Tokunaga, S. Nishimoto and Abdulaziz Alorini 2019: “A New Perspective on the Site Plan of al-Hawra', a Medieval Port on Saudi Arabia's Red Sea Coast” *The 53rd Seminar for Arabian Studies*, University of Leiden, 11th-13th July 2019. (poster presentation)



- Peacock, D. and L. Blue (eds.) 2006: *Myos Hormos-Quseir al-Qadim: Roman and Islamic Ports on the Red Sea*, vol.1: Survey and Excavations, Oxford.
- Peacock, D. and L. Blue (eds.) 2011: *Myos Hormos-Quseir al-Qadim: Roman and Islamic Ports on the Red Sea*, vol.2: Finds from the excavations 1999-2003, Oxford.
- Porter, P. L. A. (ed.) 2002: Trade and Travel in the Red Sea Region: *Proceeding of Red Sea Project I*, Held in British Museum, London.
- Power, T. 2009: "The expansion of Muslim Commerce in the Red Sea Basin, c. AD 833-969" *Blue et al. (eds) op.cit.* 111-118.
- Power, T. 2012: *The Red Sea from Byzantium to the Caliphate AD 500-1000*, Cairo.
- Regourd, A. 2011: "Arabic Language Document on Paper" *Peacock et al (eds.) op. cit.*, 339-344.
- Sidebotham, S. E., M. Hence and H.M. Nouwens 2008: *The Red Land: The Illustrated Archaeology of Egypt's Esatern Desert*, Cairo.
- Sidebotham, S. E., 2011: *Berenike and the Ancient Maritime Spice Route*, Berkeley.
- Whitcomb, D. S. and J.H. Johnson 1979: *Quseir al-Qadim 1978: Preliminary Report*, Cairo.
- Whitcomb, D. S. and J.H. Johnson 1982: *Quseir al-Qadim 1980: Preliminary Report*, Cairo.
- Whitcomb, D. S. 1989: "Coptic Glazed Ceramics from the Excavations at Aqaba, Jordan" *Journal of American Research Center in Egypt*, vol. 26, 167-182.
- 

( アラビア語文献 )

- al-Idrīsī: *Kitāb nuzhat al-mushtāq fī ikhtirāq al-āfāq*, Cairo, 1990.
- al-Muqaddasī: *Aḥsan at-taqāsīm fī ma'rifāt al-aqālīm*, Damascus, 1963.
- Yāqūt: *Mu'jam al-buldān*, Bayrut, vol. 2, 2010.

< 図版出典 >

- 図 1: Power 2009: Fig. 12-1.
- 図 2 ～ 7: サウジアラビア～日本合同調査隊資料。
- 図 8: Sidebotham 2011: Fig. 7-1.
- 図 9-1: Porter 2002: Fig. 43.
- 図 9-2: Sidebotham et al. 2008: Fig. 7.18.
- 図 10: Peacock et al. 2003: Fig. 1.3.
- 図 11: Dangaad 2009: Fig. 10.5.

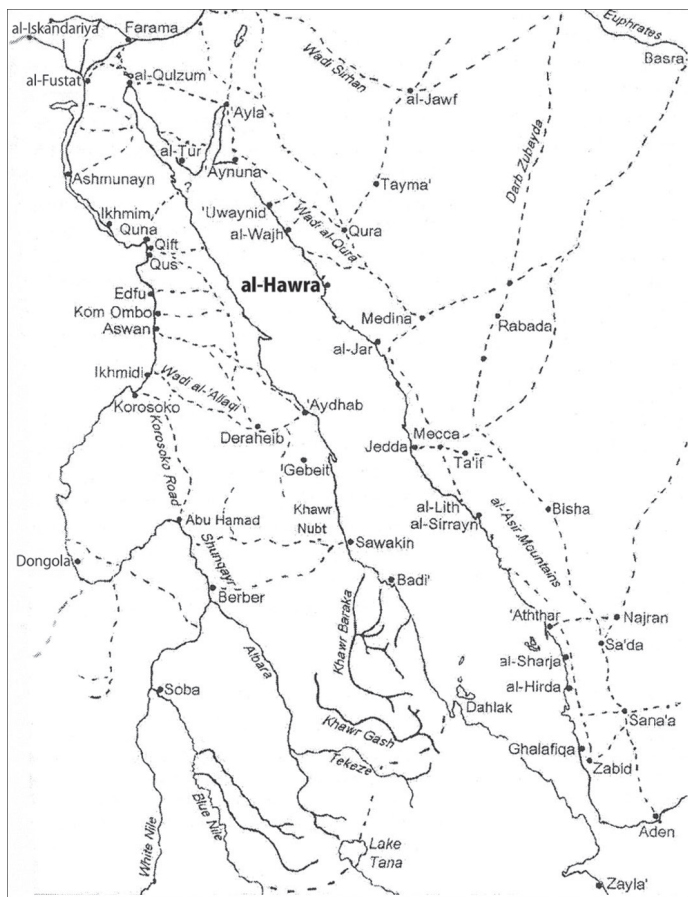


図 1: ハウラー遺跡と紅海沿岸の港町および内陸通商路の位置

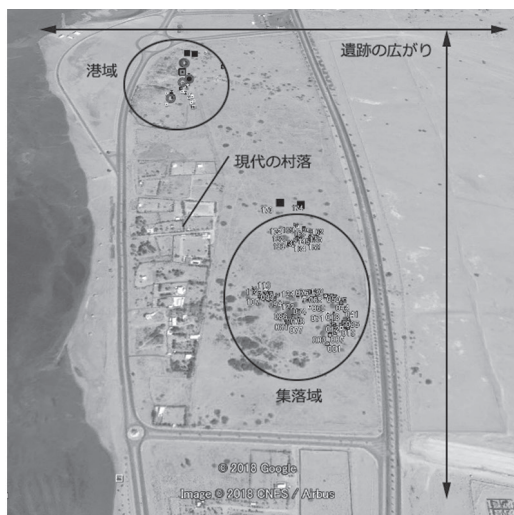


図 2: ハウラー遺跡の全体構造



図 4: House 1 area にみられる遺構



図 5: Mosque area にみられる石製リンテル

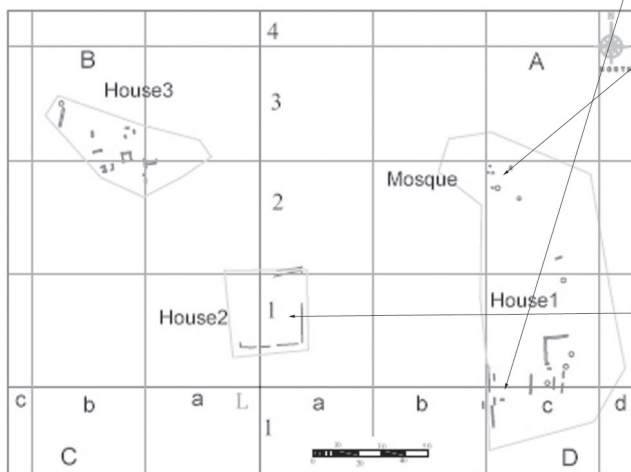


図 3: 集落域の遺構分布図



図 6: House 2 area 出土の岩とみられる遺構

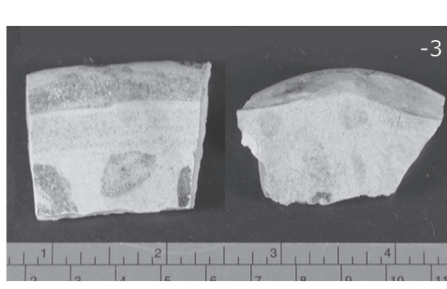
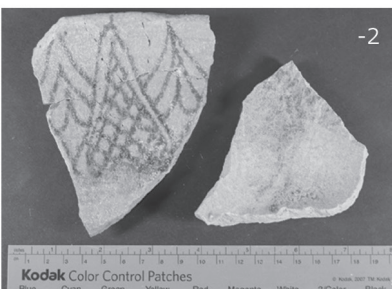


図 7: 集落域出土のイスラム陶器 (-1/ 青緑釉、-2/ 多彩釉 (釉下彩)、-3/ ラスター彩)



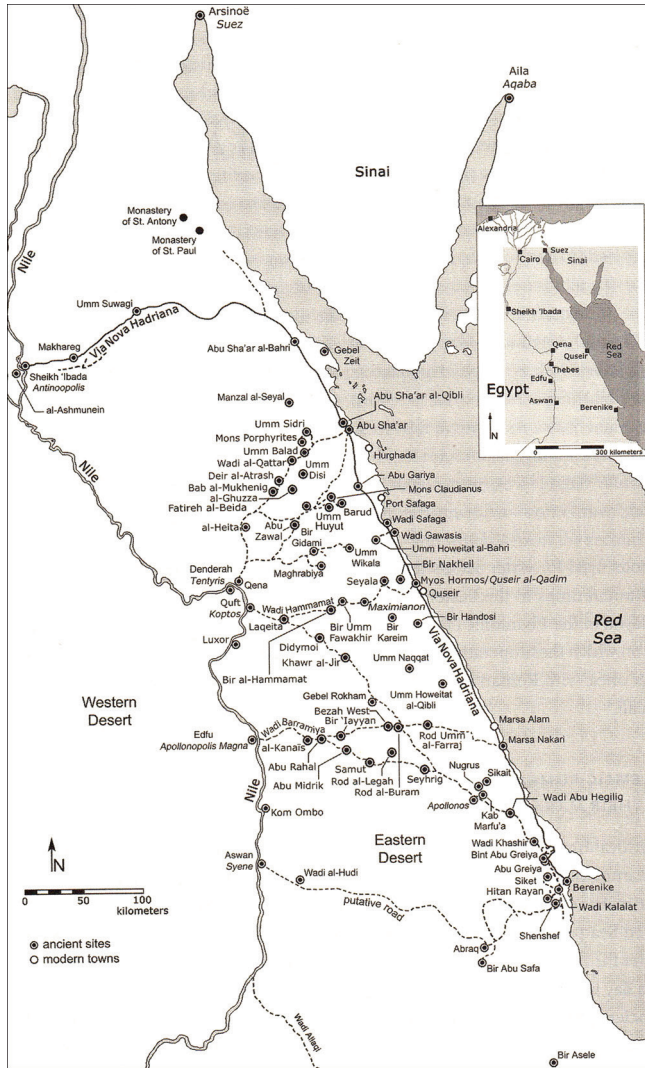
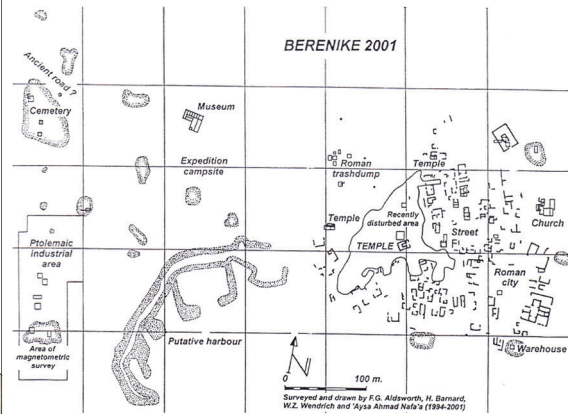
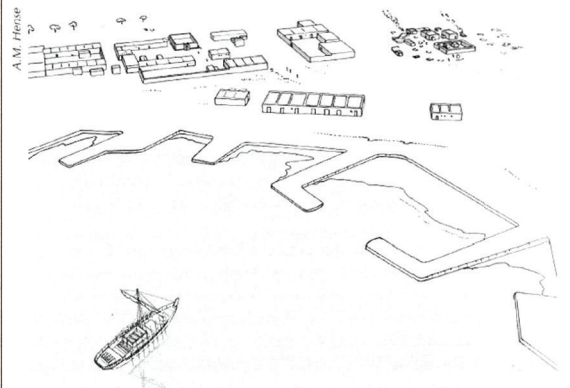


図 8: 古代末期におけるエジプト側の港と内陸通商路



-1



-2

図 9: -1/ ベレニケの遺構分布図、-2/ 港域の復元図

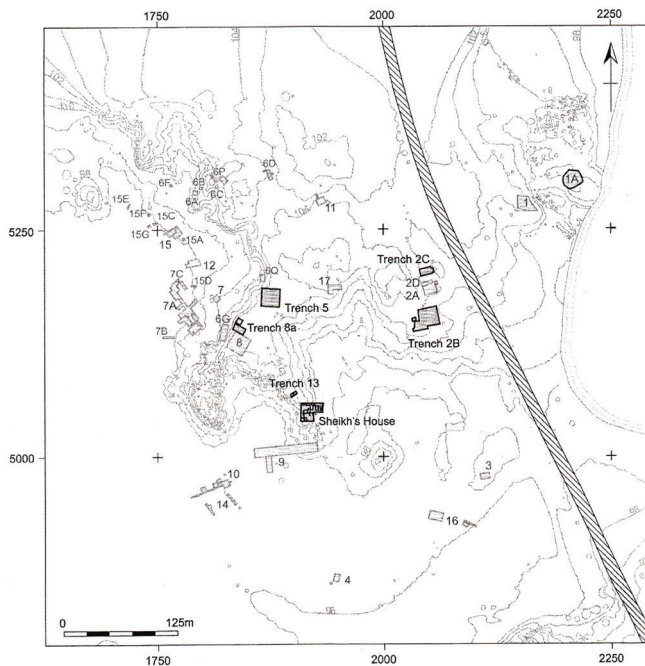


図 10: クセイルの遺構分布図

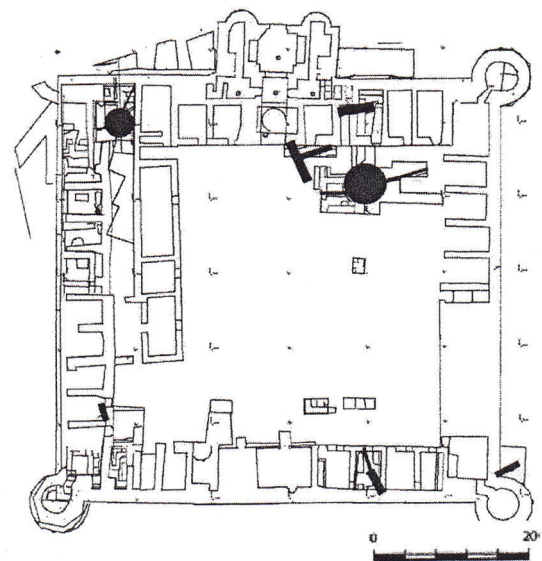


図 11: アイラ (アカバ) の岩遺構